INTERVIEW

公益社団法人地域医療振興協会 副会長
川上正舒 先生

研究の人生から，今は，地域医療の仲間になって．

聞き手：山田隆司　地域医療研究所長

研究がしたくて海外へ

山田隆司（聞き手）　今日は，地域医療振興協会で副会長を務めていただいている川上正舒先生のお話を伺います．先生はこの度，栄えある紫綬褒章をご受章されました．まずは誠におめでとうございます．その先生の業績を少し読者の皆さんに紹介していただき，また自治医科大学との関わり，協会との関わりについて，お話をお聴きしたいと思います．

まず先生の簡単なご略歴をお話しいただけますか．

川上正舒　私は東京大学出身ですが，当時は医学部が一貫教育ではなかったので，まず教養学部に入ってそこから医学部に進みました．ところが医学部に進む前に大きな学生運動が起こり，1年間以上，ストライキになったのですね．

山田　入試がなかった年ですね．

川上　そうです．そういう中でもちゃんと勉強している人たちもいましたが，私はストライキにかこつけて遊んでばかりいて，医学部の授業が始まってからもいい加減で，その結果卒業時の成績は良いとは言えず，研修後にいざ内科学教室に入ろうというときに，当時の教室からあまり歓迎されないという感じがあり，いわゆる入局の時はちょっと大変でした．

山田　ナンバー内科の時代ですよね．

川上　はい，本郷のキャンパスが第一，第二，第三内科と物療内科，神経内科，老年病科で，第四内科は当時雑司ヶ谷にあった分院にありました．

私が所属した第三内科は，歴史的にいちばん古く研究に熱心な内科でした．第一内科は臨床指向が強いと言われていて，第二内科はかなり循環器に特化していました．それで研究がしたかったので第三内科に入りたいと思ったのですが，先述のようになかなか受け入れが難しいということで，紆余曲折ありましたが，内分泌の研究室に入りました．入局当初は，臨床検査の外注が一般的ではなかったので内分泌研究室の仕事としてはホルモンを「測る」ということが非常に重要でした．そういう技術を一生懸命先輩から習っているころに，どんどん新しいラジオイムノアッセイが開発されて，ホルモンの測定が外注になっていってしまったのですね．それでただ測って症例報告をするというような研究が意味をなさなくなりました．

こんなことをやっていても仕方がないと思っていたところに，コレステロールの研究で非常に有名なコロンビア大学のデウイット・グッドマン教授の研究室で，日本人の留学生を探しているという話があったのです．それでコロンビア大学に行かせてもらうことにしました．そこは非常に活発な研究室で生化学的な研究について大変勉強になりましたが，私としてはもっと臨床的な研究をしたいと考えました．グッドマン先生は内科の教授でしたので，私も内科のカンファレンスには出席していました．そこにロックフェラー大学からアンソニー・セラミ教授が講演に来られ，「糖尿病患者では変なヘモグロビンが増えるが，これは，特殊なヘモグロビンではなく，正常のヘモグロビンに糖が結合したもので，その結合の量，すなわち糖化ヘモグロビンの量は，ある一定期間の血糖の値と相関するはずだ．この研究に興味ある人は自分の研究室に来ませんか？」と言われました．これが，今日，血糖コントロールの指標として使われているヘモグロビンA1cです．そういう時代です．それですぐにこの研究室に移りたいと思いました．

そこで，セラミ研究室の門を叩きましたが，「日本人と一緒に働いたことはないので，会いたくない」と秘書さんのところで面会さえも断られました．それでも粘って何度も会いに行き，やっと話す機会は持てたのですが，「自分は東洋人はよく分からないから，助教授のチャールス・ピーターソンと交渉しろ」と言われました．ピーターソン先生は，「グッドマンの研究室にいるならば，糖尿病のコレステロール代謝の研究をしましょう」，ということで，その研究室に潜り込むことができました．

体内で作られている物質は何だろう？

川上　その後，ピーターソン先生がセラミ先生と袂を分かつなどいろいろあり，私はセラミ先生の仕事をすることになりました．セラミ教授は多彩なプロジェクトに取り組まれており，その中に，トリパノソーマ感染症がありました．トリパノソーマに感染すると家畜が痩せて死んでしまいますが，アフリカでは家畜が大きな財産なので，経済的な影響も大きいことから，その研究に対してロックフェラー財団が援助するということでした．研究室にとっては研究費というのは大きな問題ですから，大学院の学生がそれをやらされていたわけです．